港南区市民活動団体アンケート

中間報告会&意見交換会報告

港南台タウンカフェは、2020 年度、ブランチ事業として市民活動団体アンケート調査を行ないました。2020 年度で区民活動支援センターブランチの仕組みは終了しましたが、最終的な報告書作成の参考にするため、アンケートの分析結果の共有と意見交換の機会として「市民活動団体アンケート中間報告会＆意見交換会」を開催しました。
時節柄オンラインで行ない、参加者は多くはなかったものの今後の活動支援のあり方を示唆する意見などが交わされました。
なお、今回と同様の調査を 2001 年に「まちづくりフォーラム港南」が行っており、今回の調査についてもまちづくりフォーラム港南代表の名和田氏に分析のリーダーシップをとっていただきました。

■開催日：2021 年 6 月 22 日（火）10:00~12：00
■開催方法：オンラインツール Zoom
■参加者数：14 名
■プログラム
（1）アンケートの概要と分析結果報告
（2）活動者の声
（3）意見交換
・まちづくりコーディネーター山路氏のコメント
・参加者からの意見

1）アンケート調査概要説明+解説　　名和田是彦氏（まちづくりフォーラム港南）

1．調査の概要

2001 年の調査では調査票を生涯学習支援センターの協力で配布し、239（約 50%）の回答を得た。今回も回答依頼のチラシを港南区社協に 54 通、区民活動支援センターに 244 通郵送していただき、各地域ケアプラザに配架していただくなどの協力を得、Facebook やメールでも協力を呼びかけたが、調査票そのものではなく Web での回答を求めたものであったせいか集まりが悪く、110 団体からの回答となった。

団体を生涯学習系の団体を A・生涯学習系でない団体を B とし、そのうち福祉保健分野を選んでいる団体をそれぞれ AC・BC としてそれぞれの傾向を見た。

2．生涯学習と「社会参画」、「市民活動」についての横浜市や国の政策動向

横浜市第 6 期横浜市生涯学習推進会議意見具申に、2001 年調査が引用されている。意見具申の中に、「自分のための学習と他人のための活動は循環している。」とあるが、それが果たしてあるのか、今日の報告の一つのポイント。当時も大きな論点だった。

3．市民活動団体の多様化

（1）伝統的な活動分野（生涯学習と福祉保健）の団体の構成比の低下
　　B 型が増えている。

（2）ここ 20 年に立ち上がった団体における、福祉保健分野の増加

（3）「まちづくり活動」「居場所づくり」など、20 年前にはなかった新しい分野の団体が増えた。

（4）伝統的な活動分野（A 型・BC 型）における高齢化の進行。若い世代は、多様な分野で活動している。

4．市民活動団体の専門性の向上

（1）活動の地理的範囲の拡大：専門性の向上、活動範囲が広がったのではないか？

（2）財政規模の拡大：活動範囲が広いほど財政規模が大きい傾向があるのでは？

（3）PR 活動や会報、報告書などへの意識の向上

5．女性活動者の活躍と男性活動者の増加、現役活動者の動向

（1）女性活動者と男性活動者の割合
　　A 型は男性が増えてきている。B 型は女性の活躍が多い。

（2）現役活動者の動向
　　B 型に多いが、C 型は高齢化が進んでいる。若い人が、課題解決に取り組みたい、何か新しいことを始めたいと考えているのではないか。

6．活動団体の悩み・課題と相互連携・相談

（1）人に関する悩み・課題

2001 年調査では、活動場所がないことの悩みが多かったが、今回調査では、人に関する悩みが多い。高齢化が進行していて、世代交代を心配している団体が多い。

（2）支援機関への相談と満足度

区役所は、まずまずの結果。区民活動支援センターは、相談している団体が生涯学習系にかたよっている。満足度も低いが、体制が一新されたので、今後に期待したい。

ケアプラザは、身近な存在。地域福祉計画への取り組みの中で信頼が高まった。

地区センターは、指定管理者制度導入が数字に表れている。

（3）相互連携への期待

団体同士で連携したイベントや、交流の機会があると良い…という団体が多かった。

7．学びと活動の循環

学びへの欲求は、B型C型に多い。

（1）学びと活動の循環の仮説

このアンケートでは、市民活動→学びと言うベクトルは実証できた。社会課題を解決するために、専門的な知識が必要となって学習をするという循環だ。その逆については実証できなかったが、学び→活動と言うベクトル（得た知識や技能を社会に役立てたい）も存在しているのではないかと思われる。

（2）他団体との連携・協力に見るB型の学習志向

他の団体と連携し、勉強会、研修会を行っている、また、行いたいと思っているのは、B型の方が多い。この場合の循環は、社会的課題に取り組んでいくに中で、問題意識や熱意だけでは解決できない局面で学びが必要となっていく…と言う構図だと言える。課題の複雑化や市民活動に専門性が求められていることも影響していると言えるのではないか。

【おわりに】

・コロナの多大な影響

非常に大きい影響を受けている：7~8割、少し影響受けている：2割

活動そのものができない、利用できる会場がないなど、致命的な影響を受けている団体も多くあった。

・活動の専門性に対応した支援を

市民活動に要求される専門性が高まっている。支援機関は、専門性に対応した支援をしていかなければならない。

・活動者の裾野の拡大

現役世代の活動者が増えたり、活動が多様化している等、活動者の裾野が拡大しているきざしがある。それらを大切にしていかなければならない。

・最近流行の「混合調査法」と現場感覚による数字の読み解き

アンケートの数字については、今回、タウンカフェでチームを組み、それぞれの活動の現場のことを考え議論してきた。この場でも議論ができると実りがあるものになるであろう。

2）活動を通して感じていること

①森田泰子（港南台タウンカフェ・笹下川再生プロジェクト他）

タウンカフェのスタッフでもあるが、ボランティアで笹下川再生プロジェクトという活動を行っている。日下地域ケアプラザを拠点に活動しており、活動の相談などはケアプラザにしてきた。

アンケート結果を分析していて、課題を抱えている団体が多いと感じた。団体同士で、解決できることもあるかもしれない。単独の団体から声をかけるよりは、区民活動支援センターなど中間支援的なところから声をかけてほしい。

②岡野富茂子（港南台タウンカフェ・港南台生き生きプレイパーク他）

子どもたちが外でのびのびと遊ぶ環境が乏しくなった…ということに危機感を持ち、プレイパークの活動を始めた。団体の立ち上げ支援や運営支援も大切だが、社会の課題は、一団体の取り組みで解決するようなことではないので、取り組んでいる社会的課題そのものへの理解や共感をベースとした支援が必要だと思う。今回、長く活動している団体が多く回答してくれた。長く活動している団体、ベテランの団体もそれなりの悩みを抱えている。特に、日常的に地道な支援活動をしている課題解決型の団体は、手一杯の様子。活動の段階に応じた支援が必要ではないかと思う。

3）意見交換

①まちづくりコーディネーターのコメント　　山路清貴氏（まちづくりコーディネーター）

・団体同士のつながりが必要との話があったが、2001 調査の時は、自分たちの活動で精いっぱいで交流の余裕は無いとする団体が多かった。今は、交流が必要というのは進化ではないか。
・ブランチづくりは、当時の市にあった「協働推進事業本部」で検討していた区版市民活動センターの中にあったプラン。港南区が積極的でモデル的検討の意味もありはじまった。
・「まちづくり」団体が増えているのは、「まちづくり」の言葉の意味が広がり、幅広くとらえられるようになったからではないか。「福祉」という言葉も同様に意味を広げてきたと思われる。
・専門性の向上と地理的範囲の拡大については、地域性の強い団体のテーマ性が強まったという見方とは別に、地域との係わりが弱い団体が共感をもとめて広く地域とつながってきたためとも思う。地域社会の中で、縦割り的に特定のテーマだけでつながるのでは、却って一人ひとりの暮らしが見えづらくなり、暮らし全体は豊かにならない。個別のテーマ相互が地域の中で総合化されていくのが次の展開として大切ではないか。
・区役所の機能強化が求められている。地域情勢のコアとして機能し、地域の先頭に立って、市役所と対峙したり連携していく必要がある。

区民活動支援センターは、生涯学習団体に偏った傾向が未だにあるが、市民活動、地域活動への支援の在り方もひろげていく必要がある。
・地域ケアプラザの評価が高いのはコーディネーターがいるからだと思う。きめの細かい配置で動いている施設は貴重である。今後は、地域福祉の施設を越えて、地域まちづくりの拠点としての意識をもって活動していってほしい。
・一方で、地区センターにはコーディネーターがいない。調整機能や人と人とをつなぐ機能が強化されていってほしい。

②参加者からの意見
・アンケートがどのように検討され活かされたのか知りたくて参加した。サラリーマン活動が長く、地域に貢献できることはないかと活動を始めた。イベントの機会があれば積極的に参加していきたい。
・「イベントで協力し合う」を選んだ団体が多い。イベント連携といっても、非日常の一コマではなく、日常性のある連続したものでの連携が考えられれば、生活圏のなかで定着していくのではないか。
・連携をどうコーディネートしていくのかが、ポイント。新しい区活センターに期待したい。
・区との協働事業として施設運営をしている。市民の活動団体が、市民に近いところとして施設を運営する…ということで請け負ってきたが、年々、高い専門性が求められるようになってきている。
・十数年前は、行政が市民の活動を受け入れ、色々な場を作ってくれた。今は熱い行政マンが少なくなってきたと思う。
・私達の団体は、活動スタート時から区民活動センターに相談したことはなかった。資金の相談をしたのは、社協。助成金をもらえそうなところを一緒に考えてもらった。
・団体が大きくなって、熟成している団体としての悩みがでてきていると感じている。
・新しい団体は、市民活動を仕事にしていきたいという夢をもっている。そこで既存の活動団体と温度差、ギャップがうまれている。
・目的達成にむけて連携・協力している団体が結構いるということがわかった。「今後、異種の団体と協力して地域づくりを行う」と回答している団体の２割が「すでに連携して活動している」と回答、全体の公益性あがっているからではないか？
・「公益性あがった」のは、喜ばしいこと。市民力があがったのと、地域全体が良くなればという考えがひろがってきたため。そのため、連携が必要になってきたのかと感じている。
・団体の世代交代について、以前は、継続させるための努力が必要だと思ってきたが、最近、は、目的が同じなら、新たに団体を立ち上げるというのでもいいのではないかと思っている。意識も変えながら、地域にあった支援をしていきたい。
・これまで地域コーディネートの仕事をしてきたが、コーディネートをしていく上で一番大事なことは、活動の現場を知り寄り添うこと。報告書ではわからない。コーディネートする側の人が、現場で活動する人の小さな声、困っていることや気付きを受け止めて、それを仕組みにしていく、また可能性をそこからさぐると、地域ももっとよくなっていく。

③山路氏のコメント

横浜市の発行している中間支援組織について書かれた本によると、行政が考える中間支援組織とは、地域にある施設であって、民間の中間支援組織は、違う意味付けとされている。地域の力を下請け的に利用するのか、地域に根ざした取り組みとして活かしていくのか。行政の人と議論ができるとよい。

4）まとめ

司会の言葉　　齋藤保（港南台タウンカフェ）

中間支援には、地域の相互支援が大事。中間支援的機能を持っている団体がふえると、豊かな地域になると考えている。これは、公的機関も一緒に考えるのがいい。そのためにも区域のネットワークづくりができるといい。

発行：2021 年 8 月
発行者：港南台タウンカフェ